

版本狂言記の「おりやる」と「おぢやる」：詞章整理のあとづけ

著者	大倉 浩
雑誌名	日本語と日本文学
巻	5
ページ	30-40
発行年	1985-11-30
URL	http://doi.org/10.15068/00162028

版本狂言記の「おりやる」と「おぢやる」

——詞章整理のあとづけ——

大 倉 浩

一、はじめに

能楽とともに中世に成立をみた狂言は、その流動の時期を経て、近世に入ると筋書きが定着し、台本が書き留められるようになる。その後の狂言は、しだいに古典劇化の傾向を強め、近世の中期以降は、その詞章も整理・洗練され固定したものとなって、今日まで傳承されている。

このようにして近世初期に書き留められた狂言台本は、いっぽうでは中世から近世にかけての日本語をさぐる資料として、大蔵流・和泉流の伝書などが広く利用されてきた。また、万治三(一六六〇)年刊『絵入狂言記』をはじめとする四種の版本狂言記も、それらの狂言台本とともに日本語史の資料として十分に利用しうるものである。しかし、これまでの研究は、由緒・伝来の明らかな大蔵流・和泉流の狂言台本を重視し、読みものとして公刊され流派や出自のはっきりしていない版本狂言記は、等閑視されることが多かった。そこには、狂言という舞台劇の台本を、いかなる時期のいかなる言語資料として用いてきたのか、という問題もかかわってくるが、この

版本狂言記の重要性は、早く亀井孝(一九四四)をはじめ、蜂谷清人(一九八〇)、小林賢次(一九八〇)、北原保雄(一九八三)の指摘するところである。

本稿では、狂言詞章において特殊な傳承をもつ「おりやる」「おぢやる」⁽³⁾両語に注目して版本狂言記各篇・各曲の分類を行ない、それを通じて、版本狂言記において、

一、他の狂言台本と類似する曲では、「おぢやる」より「おりやる」を用いる傾向があること。

二、「おりやる」「おぢやる」両語が併用されている曲には、両語間に用法や文体の上で差異がみられるものがあること。

の二点を指摘する。そして、これらのことは、近世初期の狂言が「おりやる」専用へ詞章を整理していく過程の、版本狂言記への反映として解釈できることを述べて、あらためて版本狂言記の資料的価値を確認する。

二、狂言詞章における「おりやる」と「おぢやる」

狂言詞章における「おりやる」「おぢやる」両語の使用に關し

ては、亀井（一九四四）がとりあげて以来、特殊な伝承の例として知られている。すなわち、「おりやる」は「お（ん）入りある」に、「おじゃる」は「お（ん）出である」に、それぞれ由来する語と考えられ、ともに「行く・来る」あるいは「いる・ある」の意の尊敬語として、また丁寧語として、「ござる・ござある」よりは低い敬意で、虎明本など狂言台本、キリシタン文献のなかで併用されている。

たとえば、虎明本では、

① いや、此かゞみを見て、路次のほども覚へひで、はや古郷へ下りついた、おじやるかゝ、たゞいまくだつておりやるはへなふうれしや、是の人が下られたものじやよ へ只今下ておじやるは（鏡男）巻二340ペ）

というように、帰郷した夫から妻へのことばの中に両語が併用されている。この部分を虎清本でみると、

② いや此かゝ見をみてるしのほどもおほへいではよきやうにくだりついた。なふうれしやゝおりやるか。ゝ。只今くだりつておりやるぞ へ女なふこれの人がくだられたものじやおとこへたゝいまくだつたぞ（同28ウ）

と、「おりやる」専用である。また逆に、虎清本で、

③ へさいゝゝたてばしからるゝに。何事でおじやるぞよ（猿座頭）7オ）

と「おぢやる」を用いた所が、虎明本では、

④ へさいゝゝたつてふしんをせらるゝに、何事でおじやるぞ（同）巻二 829 ペ）

のように「おりやる」となっている例もある。

以上の例からみても、虎明本・虎清本の中では、両語の間に積極的な差がみとめられず、〔表一〕に示すように、用例数においてもほぼ拮抗している。

〔表一〕⁽⁴⁾

文 献 名	「おりやる」	「おぢやる」
・天 理 本 （寛永年間）	50	39
・虎 明 本 （寛永19年）	161	173
・虎 清 本 （正保3年）	22	21
・和 泉 家 古 本 （承応～元禄）	59	0
・正 篇 （万治3年）	70	249
・外 篇 （元禄13年）	11	31
・続 篇 （元禄13年）	90	10
・拾 遺 （享保15年）	135	0
・虎 寛 本 （寛政4年）	624	0
・天草版平家物語 （1593）	3	27
・天草版伊曾保物語 （1593）	2	5

〔表一〕は、大蔵流・和泉流の狂言台本、そして版本狂言記を成立年代順に並べ、両語の用例数を示したものである。詞章固定以前の台本（天理本・虎明本・虎清本）では、共通して両語の勢力が拮抗している。いっぽう固定期の台本（和泉家古本・虎寛本）では、共通して「おりやる」専用となっている。

こういう状況の中において、版本狂言記を見るに、拾遺では「お

りやる」専用、統篇でも「おりやる」が優勢で、固定期の台本二種と似た様相を示すが、正篇と外篇は「おちやる」が優勢であり、他の狂言台本とは異なった、むしろ「表二」の下段に示した、中世末期成立のキリシタン文獻(『天草版平家・伊曾保』)における両語の比率と似た傾向にあることが注意される。

この間の事情を亀井(一九四四)は、

狂言を離れて、ひろく「おりやる」と「おちやる」との発達を探ると、前者は夙に室町時代中期に属する文獻中に見出されるが、後者は降つてさきに挙げた耶蘇会関係の文獻及び捷解新語にみる例が古い方である。その勢力はさして強くない。故に「おりやる」と「おちやる」とでは、前者の方が早く発生してゐたものと推察される。文獻的には「おちやる」は、殆ど室町時代へ入り得ないのである。かゝる新しい發生の「おちやる」を現行の大蔵流に存しないのは、もし虎清本がなければ、そのまゝ室町時代の古風を伝へたものと推断してしまふ所である。故に、今日、大蔵流が古い形を存してゐるとはすでにいはいれてゐる所であるが、これには、じつは但しがきが要るわけである。つまり、「おちやる」のないのは、復古的な修復の結果によるものなのである。(247ペ～248ペ)

と述べ、両語の併用から「おりやる」専用への整理を、「復古的な修復の結果」ととらえている。

しかし、狂言詞章の整理が、他の丁寧語の場合、「ござある」と「ござる」の併用から「ござる」専用へ、「ますする」と「まする」の併用から「まする」専用へ、というように、より新しい語形のほうへ整理している事例と、この「おりやる」の復古はどのように関

連するの、疑問となる。この点について、亀井(一九四四)はつづいて次のように述べる。

しからば、何ゆゑに、大蔵流で後に「おちやる」を廃したか。「おちやる」は新しいといつても、すでに室町時代の末までには成立してゐた形である。俗語が文獻に現れるのは、その發生から多少とも時間を経過した後であるが、「おちやる」はその品位において文獻に登場する機会の乏しい語であつたにちがひない。その拗音「ぢや」を含む語形は、狂言においては、却つて俗な表現効果を示したであらう。⁽⁵⁾時代的に言つては、「おちやる」の狂言に現れる点を以て、直ちにこれを後世的な変改とのみ断じ得ない。つまり、問題は、「おちやる」の語としての品位にあるのである。品位のあるかないかの価値判断が、狂言の表現を俗にするかといふ様式上の問題を取り上げさせるのである。

「おちやる」に俗な感じを伴ふ根拠には、その俗語的勢力が考へられる。すなはち、狂言記において「おちやる」の勢力が「おりやる」を凌いでゐるのは、万治寛文から元禄へかけての當時の口語としての「おちやる」の生活力を反映してゐるのであるが、「おちやる」ではあまり生々しいとする感じが、後に却つてこれを斥け、「おりやる」で代置したのである。(248ペ～249ペ)

また、蜂谷(一九七七)も、これをうけて、

一般的でなくなつた場合、まだ卑俗的なものとして特殊な層に残っているものを排して、むしろ古語化したものを用いようとするのは、古典劇と化しつつある狂言のことばのあり方として当然の成り行きであつたのかも知れない。(二二六)

と述べて、近世初期の「おぢやる」が有していた卑俗性をその理由としている。

大蔵流・和泉流での「おりやる」専用への整理に関する両者の推定は、首肯できるものであるが、版本狂言記を「おぢやる」優勢という面だけでとらえると、事実を見誤ることになる。なぜなら版本狂言記においても（表一）にみたように、「おりやる」専用の拾遺があり、他の三種でも比率の差こそあれ「おりやる」も用いられており、「おぢやる」優勢の正篇でも、七〇例もの「おりやる」が用いられているからである。

その点で小林（一九八〇）は、版本狂言記各篇の相違に留意しながら、「おりやる」「おぢやる」および「ござる」の三語と、それらの否定表現形式に着目して整理している。その中で小林は、

「オ（ン）入リアル」を相形とする「オリヤル」は、室町時代末頃から「オヂヤル」と交替する形で次第に衰退したものとみられ、江戸時代前期においては、「オヂヤル」の方が一般的なものであったと考えられる。したがって、『狂言記』及び『狂言記外』における状態は、そのような国語史的な流れを反映したものとみることができ、逆に『続狂言記』『狂言記拾遺』の場合は、虎寛本と同様、舞台言語としての統一・固定化がなされているものと考えられる。（556ペ）

と、先引の両者の推定をふまえ、版本狂言記各篇について、（表一）での筆者の見通しと同様の見方を提示している。

しかし、それ以上の両語間の問題については、『狂言記』の場合、右のごとく「オヂヤル」が優勢であるが、個々の曲について見ると、その使用状況はさまざまである。極

端な場合、冒頭の「烏帽子折」では、下人同志の会話においてはもっぱら「オリヤル」を用いており（「オリヤラヌ」を含む一二例）、「オヂヤル」は用いられていない。また巻三「八句連歌」の場合、

②⑥▲庄右エ門さてもく。きゝあやまりて。おぢやつた。でけ
た句でおりやる。

（26ウ）△丁寧語▽

のように、同一場面において「オリヤル」「オヂヤル」を併用しており、曲全体では、「オリヤル」二〇例、「オヂヤル」七例と、むしろ「オリヤル」の方が優勢である。このような個々の曲ごとの状況は、その伝承関係にも由来するものと思われ、なお精査を必要とする。（556ペ～557ペ）

と、いくつかの曲をあげてはいるが、全曲にわたる精査の必要性を示唆するにとどまっている。

たしかに、資料としてみた場合、虎明本などの狂言台本が、一人の狂言師によって自分の流派の狂言を書きとどめたもので、統一的均質的な傾向が強いのに対し、版本狂言記は、出自を異にする雑多な曲の集まりであり、記述の程度もまちまちなバラエティーに富んだ資料である。小林の言うように、各篇各曲ごとの「おりやる」「おぢやる」両語の使用状況を精査することが、ぜひとも必要となってくるのである。

三、曲別にみた両語の使用状況と伝承関係

版本狂言記のうち、「おりやる」「おぢやる」が併用されている正篇・外篇・続篇の三種について、A（両語の併用曲）・B（「おぢや

る「専用曲」・C「おりやる」専用曲」の三つに分類し、それぞれの曲数を示したのが〔表二〕である。

〔表二〕⁷⁾

	正篇 外篇 続篇			天理本 虎明本 虎清本		
A 〔おりやる〕併用曲 B 〔おちやる〕専用曲 C 〔おりやる〕専用曲	1	25	8	30	18	7
	3	18	2	10	8	13
	22	2	5	4	1	1

Aの両語併用曲が各篇にみえるいっぽう、正篇・外篇ではBの「おちやる」専用曲、続篇ではCの「おりやる」専用曲が、それぞれ中心を占めており、「表一」と同様、「おちやる」優勢の正篇・外篇、「おりやる」優勢の続篇という傾向が曲数の上にもあらわれている。

ところで、版本狂言記の各曲についての出自・伝承関係については、狂言史研究の立場から、各流派の狂言台本との比較対照を行なった池田廣司（一九五三）の研究がある。池田の研究は、版本狂言記全二〇〇曲につき、筋立て・詞章に注目し、類似のみとめられる狂言台本を指摘したもので、曲数を集計して示すと、次の〔表三〕のようになる。

この結果から池田は、版本狂言記各篇の出自について、次のように推定している。

正篇：固定前の大蔵流や大蔵流の配下であって歌舞伎と交流のあった群小諸派の町風の狂言台本によったもの。

外篇：筋立てやせりふもかなり自由であった固定前の大蔵流や大

〔表三〕

	虎明本に近い曲					正篇
虎寛本に近い曲	5	3	1	0	4	6
天理本に近い曲	17	1	0	9	20	0
三百番本に近い曲	18	13	0	3	4	1
不明の曲（各台本とも大差なく、何に近いかとも判別できない曲）						
不似の曲（狂言記のみの曲）						
不可の曲						
	5	3	1	0	3	0
	17	1	0	9	20	0
	18	13	0	3	4	1
	17	11	0	4	5	12

蔵の弟子であった三宅派の町風の台本に拠ったもの。

続篇・拾遺：群小諸派から遠ざかり、刪定或いは固定せる大蔵流を多分に反映した台本によったもの。（114ページ、115ページ、抜粋）

この分類は、狂言史研究の立場からなされたもので、筋立てやせりふの内容など、演出を中心にした比較をもとにしており、「虎明本に近い」といっても、せりふの一語一語までが一致しているというのではない。しかし、版本狂言記各曲の位置づけには、ひとつの見通しを与えてくれるものであり、版本狂言記四種についても、詞章固定前の正篇・外篇、固定した続篇・拾遺という推定は、前節までの「おりやる」「おちやる」の使用からみた各篇の相違にそったものとして支持することができる。

次に、〔表二〕で整理した正篇・外篇・続篇の「おりやる」「おちやる」を含む曲について、その曲が〔表三〕で示した分類では、どの台本に近い曲であるのか、あるいは不明・不似・不可の曲であるのか、という観点から整理してみたのが次の〔表四〕である。（表

(二) にならって、A「おりやる」「おちやる」併用曲、B「おちやる」専用曲、C「おりやる」専用曲」という順に示し、「類似(虎明本・虎寛本・天理本・三百番本に近い曲)」と、「不似(不似・不可の曲)」とに大きく二分し、それぞれの曲数を示した。他の狂言台本と類似するか否かが、その曲の出自・伝承関係をみる手がかりとなると考えたからである。

〔表四〕⁽⁹⁾

C		B		A		
不似 4	類似 19	不似 23	類似 11	不似 7	類似 7	
1		25 (3)		8 (1)		
0	1	21	1	4	3	
	虎明 1	不似 不可 1 20	虎明 1	不似 4	虎明 天理 1 2	正 篇
3 (1)		18 (7)		2		
0	2	1	10	0	2	
	虎明 三百番 1 1	不似 1	虎明 三百番 1 9		三百番 2	外 篇
22 (2)		2 (1)		5		
4	16	1	0	3	2	
不似 4	虎明 虎寬 三百番 2 8 6	不似 1		不似 不可 1 2	虎明 虎寬 1 1	続 篇

この表でまず注目されるのは、「不似」グループの曲の分布である。上段の正篇でみると、Aの「おりやる」「おちやる」併用曲八

曲では、「類似」三曲対「不似」四曲と、半ばしているが、Bの「おちやる」専用曲二五曲中では、「不似」二一曲と大半を占め、逆にCの「おりやる」専用曲は一曲だけだが、これは「類似(虎明本)」の曲である。

中段の外篇でも、Cの「おりやる」専用曲三曲の中に「不似」の曲はみえない。ただし、Bの「おちやる」専用曲一八曲では、正篇と異なり一〇曲が「類似」の曲になっている。しかしこれは、先の「表三」を見れば明らかのように、外篇には不似・不可の曲があわせて三曲しかなく、非常に少ないためであって、そのうちの一曲がBにあらわれており、「おりやる」を含むCやAの曲には「不似」の曲は全くないのである。

下段の続篇では、Cの「おりやる」専用曲のうちにも、四曲の「不似」の曲がある点に問題が残るが、続篇は全体的に「おちやる」の例が少ないのであり(表一)に示したように、全部で一〇例しか用いられていない)、そうした続篇であって「おちやる」を含むAやBの曲に、「不似」の曲が計四曲あること、また(表三)に示したように、続篇にただ一曲しかない不可の曲が、このAの「おりやる」「おちやる」併用曲に入っていることが注目される。

さらに、この表を縦に見て、A群・B群・C群とまとめてみると、A群では「類似」と「不似」の曲数がほぼ等しい状態にあるのに、「おちやる」専用のB群では二三曲対一一曲と「不似」の曲が多く、逆に、「おりやる」専用のC群では一九曲対四曲と、「類似」の曲が圧倒的に多くなっている。

つまり、「おりやる」「おちやる」両語のうち、「おちやる」でなく、「おりやる」のほうを用いていれば、その曲が他の狂言台本と

類似している可能性が高いことである。特に、「おぢやる」が優勢の正篇・外篇において、C群の「おりやる」専用曲がすべて「類似」の曲であることが、それを端的に示している。そして、前節でみた「おりやる」「おぢやる」併用から「おりやる」専用へという詞章整理の過程のなかで、これをとらえるならば、版本狂言記の中でも他の狂言台本と類似する曲においては、「おりやる」専用へ用語を整理する動きがあらわれているということである。全体としてみれば、固定前の狂言の姿をうかがわせる正篇や外篇でも、その中には、「おぢやる」を廃し「おりやる」に統一するなど詞章を整理し、当時の固定化しはじめた狂言を伝える曲が含まれている、ということになるのではないだろうか。

池田（一九五三）の分類が、そのまま版本狂言記各曲の出自・伝承関係を示すこととはならないが、〔表四〕のC群にみられるような、「類似」の曲における「おりやる」専用の傾向は、この分類を支持するものである。また、「おりやる」以外のキーワードについて精査してみると、この分類を訂正していくことも可能⁽¹⁰⁾であると考えられる。

四、版本狂言記の「おりやる」と「おぢやる」

この節では、正篇・外篇のA・C群の曲に注目して、前節で述べたことをさらに明確にするとともに、具体的な用例から両語の用法・文体上の差異などについてみてみたい。

まず、正篇唯一のC群の曲「烏帽子折」（「おりやる」二例）が、第一巻の冒頭の曲であることに注目したい。北原（一九八三）は、この曲が大蔵流において、大名狂言〔虎明本〕から脇狂言〔寛

文以前書上〕以後）に所属替えをしたほどの当時の人気曲であったことを指摘し、曲名も「烏帽子折」と、大蔵流での「麻生」という曲名にくらべて、より脇狂言らしい題名となって正篇の冒頭をかざっている意義を見い出している。そのように近世的改変・整理をうけた祝言性の高い曲であるからこそ、下人同士の会話にも、俗な「おぢやる」よりあらたまった感じの「おりやる」がふさわしかったにちがいない。

また、外篇のC群の曲であるが、外篇の「おりやる」全一一例（表一）参照）のうちの七例が、C群の「さっくわ」（三百番本に近い曲）に用いられているのである。つまり、残る外篇のC群・A群の計四曲には、「おりやる」が各一例使われているにすぎない。そのうえ、筋書き程度の短い記述の曲が多い外篇において、この「さっくわ」は珍しく記述が詳細で、五丁半にも及ぶ外篇の最長曲である。さらに、外篇の特徴としてしばしば指摘される「まらする」の使用も、この「さっくわ」には全くみられず、「まする」専用である点でも特異である。これらの点からも「さっくわ」が近世的整理の加わった曲であることがうかがえるだろう。

このように、「おりやる」専用のC群の曲には、「おりやる」専用であるということ以外にも、他の正篇・外篇の曲にくらべて特異な点を持った曲が多いことがわかる。

さて、次に「おりやる」「おぢやる」併用のA群の曲から、両語の差異をみてみよう。

○正篇「吟じ響」（不似の曲⁽¹¹⁾）

⑥▼六郎兵へおもてにあん内が有がたれぢや。しらぬまでい。いゑ。作兵衛。ようおりやつた ▲むとはつ ▲六郎兵へして又是

は。いつもよりきらびやかにおぢやる ▲むこ此様子をば。めきくなされませい ▲六郎兵へさればの。むこ入などでは。おりやるまひか (巻一 9ウ)

○外篇「昆布売」(三百番本に近い曲 1/5)

⑦▲アト見らるゝとをり自身太刀をもつておぢやる。わごりよにもつてもらいたいといふ事でありやる (巻一 13ウ)

○統篇「昆布ふせ」(不可の曲 3/1)

⑧▲長老や。誰たれよふおりやつた。何と思ふておぢやつたぞ (巻三 25オ)

これらの曲の⑥～⑧の例を見た限りでは、「おりやる」「おぢやる」両語が近接して、ほとんど区別なく用いられており、第二節でみた虎明本・虎清本の例同様に、両語間に積極的な差違を見出しがたいようである。やはり小林(一九八〇)のように「ござる」⁽¹²⁾と「おぢやる」⁽¹²⁾との比較が有効であり、特選的な差や、丁寧語化の程度から傾向を見出すことが必要であろう。

しかし、正篇のA群の曲の中には、以下のように両語の間の文体的な差をうかがわせる例がみえる。

○「八句連歌」(虎寛本に近い曲 22/7)

⑨▲庄右衛門ならふとなるまひと。おぢやれ

▲九郎二郎 おふまいれなら。参りませう ▲庄右衛門 おりやれく (巻三 28オ)

⑩▲庄右衛門したら。かうもおりやらふか。さくらになせや。雨のうき雲と。いたしておりやる。 (同 30オ)

○「富士松」(虎寛本に近い曲 9/2)

⑪▲とのやいくわじや。扱もく。みやげましておぢやる。庭が

いかう見事でおりやる。それかしも。なんちがるすのまに。庭をつくつた。 (巻五 20ウ)

⑫▲とのうしよ。そのうへ道すがらの句でおりやる。句におまきやつたら。松をとるぞ ▲くわしゃ畏て御ざる ▲とのかうも。

おりやらふか。あとなる物よ。しばしとまれ

(同 21ウ～22オ)

ともに虎寛本に類似する曲であり、登場人物間でも連歌のやりとりが中心となる曲である。両語併用のA群の曲といっても、二二対七、九対二と、ともに「おりやる」のほうがかなり優勢である。まず、「八句連歌」では、「おりやる」「おぢやる」ともすべて、金の貸し手(庄右衛門)から借り手(九郎二郎)へのことはに用いられており、逆に借り手の九郎二郎は、「ござる」「ござりまする」を用いて「おりやる」「おぢやる」は用いていない。ここで、⑨と⑩の場面を比較してみると、⑨のような普通の会話においては、庄右衛門は「おりやる」「おぢやる」を併用しているのに、劇が進行し連歌のやりとり場面になると、⑩のように「おりやる」専用で、全く「おぢやる」は用いられていないのである。

次の「富士松」も同様で、この場合の会話は主人と冠者との間のやりとりだが、「おりやる」「おぢやる」を用いているのは主人から冠者へのことばの中においてである。この曲でもやはり、⑪のように普通の会話には「おりやる」「おりやる」が併用されているのに、⑫のように、連歌のやりとりでは「おりやる」しか用いられていない。「おぢやる」が避けられているのである。このような使い分けは、何を意味するのだろうか。

これは、正篇刊行当時の近世初期において、「おぢやる」が持つ

ていた俗な語感が、あらたまった連歌のやりとりの場面にはそぐわないと意識されていたためではないか。連歌の場面では「おりやる」専用とし、会話の場面では「おちやる」を加えることによって、ことばの上でも対照的な効果をあげたものと解される。いわば、両語間の文体的な差異が、この⑩⑪⑫の例にあらわれたものと考えたい。さらに、このような使い分けのみられる曲が、正篇の中でも数少ない「類似」の曲であることも、詞章整理との関連から見逃してはならないだろう。

そして、A群の曲の中には、他にも同様の観点から「おりやる」の使用が説明できる例がある。正篇の「萩大名」は「おりやる」二例、「おちやる」一一例と、「おちやる」が優勢で、〔表四〕でいえば不似の曲である。「おりやる」「おちやる」ともすべて大名から庭の亭主へのことばに用いられている。そのうち「おりやる」があらわれるのは、

⑬ ▲大名御てい。たゞ今は。歌をよめとおしやる。ひさしうよまぬが。なにとおぢやろ。一つよもふか ▲ていしゅあそぼしませう ▲大名 かうも。おりやろか。七へ八へ。九へとこそおもひしに。とへさきいづる。はぎの花かな ▲ていしゅあゝ是は。いかうでけさつしやれて。御ざります ▲大名ていしゅ。身は

歌よみで。おりやるいの

(巻一 28ウゝ29オ)

というように、大名が冠者の助けで慣れない和歌をよむ場面である。それまで庭をながめ、くつろいでいた大名が、亭主の注文に、いかにももったいぶった様子で歌を詠み、得意げに歌詠みを自任する場面に「おりやる」が用いられているのである。それまでは「御てい」と呼んでいた庭の亭主を、あらためて「ていしゅ」と呼び直

しているところにも、大名の威儀を正す様子がうかがえるだろう。⑩⑪の例と同様、ここでも歌を詠むという場面に「おりやる」が選択されているのである。

他にも正篇A群の「末広がり(天理本に近い曲)」「粟田口(不明の曲)」でも、「おりやる」が初対面の場面、主人の口上を伝える場面に用いられており、あらたまった語感を持った「おりやる」が使われた例として、同様の観点から説明できるだろう。

このように、正篇を中心としたA群・C群の曲を個々にみることによって、

一、俗な語感をともなう「おちやる」が、古典劇化していく狂言にとって、ふさわしくない語になりはじめていること。

二、「おちやる」に対して、古くあらたまった語感を持つ「おりやる」を用いようとする、狂言詞章の整理がはじまっていること。

の二点をさらにあとづけることが出来る。

もちろんこの場合、外篇や続篇のA群の曲の検討も必要であるが、先にあげた⑦⑧の例のように、差異の見出しがたいものも多く、用例数の少ないこと(〔表一〕参照)もあって、正篇のように説得力のある例をあげ得ないのが実情である。狂言以外の文献にみる両語の実態を含め、別稿にゆずりたい。

五、おわりに

以上、論点をしぼり、細部にわたって述べてきたが、本稿の基本的立場は、版本狂言記を、統一的均質的な文献として一括して扱うのではなく、その各篇各曲の出自・伝承のちがいを重視する立場で

ある。そうした立場に立った時にはじめて、前節までに見てきたような、「おりやる」「おちやる」両語の曲ごとの用い方の差異が、見逃すことのできない重大な問題となってくるのである。

そして、版本狂言記（特に正篇・外篇）を、近世初期の言語資料として、また狂言詞章の変遷のあとづけとして利用する場合、本稿のような立場から出発することが必要であると考えた。

なお、本稿で用いた版本狂言記、および主な狂言台本は以下の通りである。（ ）内は略称。

・『絵入狂言記』（正篇） 万治三（一六六〇）年刊。学習院大学寛文二（一六六二）年再摺（安田版）本を用いた。

・『狂言記外五十番』（外篇） 元禄十三（一七〇〇）年刊。東京大学国語研究室蔵初版（野田版）本を用い、鴻山文庫蔵本を参照した。

・『続狂言記』（続篇） 元禄十三（一七〇〇）年刊。筑波大学蔵初版（八尾版）本を用いた。

・『狂言記拾遺』（拾遺） 享保十五（一七三〇）年刊。東京大学国語研究室蔵初版（野田版）本を用いた。

・大蔵虎明書写『狂言之本』（虎明本） 寛永一九（一六四二）年書写。池田・北原共著『狂言集の研究』（昭和四七・五八年 表現社）を用い、複製本を参照した。

・大蔵虎清手訂『狂言之本』（虎清本） 正保三（一六四六）年清虎書写。古川久編『狂言古本二種』（昭和三九年 わんや書店）を用い、複製本を参照した。

・大蔵虎寛書写本（虎寛本） 寛政四（一七九二）年書写。笹野堅

校訂『能狂言』（昭和一七・二〇年 岩波書店）を用いた。

・和泉流『狂言六義』（天理本） 寛永年間ごろ、山脇和泉元永の書写か。複製本（昭和五〇・五一年 八木書店）を用いた。

・和泉家古本『六義』（和泉家古本） 承応から元禄年間ごろ、山脇和泉道甫書写か。池田廣司編『日本庶民文化史料集成四 狂言』（昭和五〇年 三一書房）の翻刻を用いた。

参考文献

池田廣司（一九五三）『版本狂言記の台本について』（『国語』二一・三 昭和 二八 九月）

亀井 孝（一九四四）『狂言のことば』（『能楽全書 五』創元社 昭一九）北原保雄（一九八三）『狂言記の研究 解説篇』（昭五八 勉誠社）

小林賢次（一九八〇）『版本狂言記におけるゴザル・オリヤル・オヂヤルとその否定表現形式』（『近代語研究第六集』昭五五 武蔵野書院）

小山弘志（一九五六）『狂言の変遷』（『文学』昭三一 七月）

峰谷清人（一九七七）『狂言台本の国語学的研究』（昭五二 笠間書院）

同（一九八〇）『狂言のことば（補）』（『能楽全書 綜合新訂版五』昭五五 東京創元社）

(1) 小山（一九五六）の区分にしたがう。

(2) 以下、四種の狂言記の総称としては「版本狂言記」を用い、各篇について言及する場合には、それぞれ、「正篇」「外篇」「続篇」「拾遺」と略称する。

(3) 各活用形の用例を総称して「おりやる」「おちやる」を用いる。なお「おりない」は両語の用例から除いた。

(4) 小林（一九八〇）の調査などをもとに、筆者が再調査したもの。

(5) それに加えて、「おちやる」とともに「御出ある」に由来する「おでやる」という語が、虎明本でも版本狂言記でも用いられている。この「おでやる」との併存が、「おちやる」をさらに俗なものにしてい

たのではないかと考えたい。なお、「おりやる」にはそのような語はない。

(6) 本稿でいう正篇のこと。

(7) 各篇五〇曲のすべてに両語が用いられているわけではないので、各篇での曲数の合計は五〇曲にならない。また、対照する意味で、天理本、虎明本（女狂言・智山伏類のみ）、虎清本における状況を下に示した。これら三本における分布の状況にも興味ある問題があるが、本稿ではふれない。

(8) 不明の曲というのは（表三）に示したように、類似はしているものの、どの台本とも特定できない曲のことである。そこで本稿では「類似」「不似」のグループ分けから除外したが、なお問題も残る。

(9) 数字は曲数を示す。（内は「不明」の曲の曲数

(10) たとえば外篇において併用されている「まらす」と「まする」もキーワードとなるようである。これについては別に述べたい。また、（表三）で虎明本に近い曲とした正篇の「舟ふな」は、「おちやる」専用でB群の曲になるが、この曲は天理本にも見え、むしろ「不明」とすべき曲と考えられる。

(11) 数字は、「（おりやる）」の用例数／「おちやる」の用例数」を示す。以下同じ。

(12) 外篇の「おりやる」一一例は丁寧語（丁寧語を含む）の例ばかりで、尊敬語の例はない。（正篇の「おりやる」七〇例のうちには一二例の尊敬語を含む）逆に外篇の「おちやる」三十一例のうち一八例が尊敬語の用例であるのに、正篇の「おちやる」二四九例のうちには、尊敬語の例は二四例しかない。正篇にくらべて「おちやる」の丁寧語化が進んでいないことが知られる。

付記

本稿は国語学会昭和59年春季大会において研究発表した内容に手を加えたものである。席上、福島邦道氏、峰谷清人氏、辻村敏樹氏より御教示をいただいた。また、北原保雄先生には、原稿を一読願ひ、数々の御

助言をいただいた。記して感謝を申し上げる。

（静岡英和女学院短大講師）